

## LL教室開設40周年

### 早大・田辺名誉教授が記念講演

LL教室の開設40周年を記念した記念講演会と記念式典が10月5日、生田キャンパスで行われた。

講演会では、早稲田大学名誉教授で現・東京国際大学言語コミュニケーション学部長、大学英語教育学会会長の田辺洋二氏が、「大学の言語教育：教育工学に支えられた40年」と題して講演。LL設備、言語教育の変遷を、社会背景を交えながら「現在の日本の大学教育では“teach(教える)”より“research(研究する)”が重視されている」と問題点を指摘し、「LL機材が年々進化する中、教える側も知識を増やし、対応していかなければなりません」と論じた。講演後には活発な質疑応答が行われた。

引き続き、約50人が参加して記念式典が催され、日高義博学長、出牛正芳理事長が祝辞を述べた。三浦弘LL研究室長の解説により「写真で見るLL教室40年」を視聴した後、萩原力、山本慧一両名誉教授をはじめ、歴代のLL研究室長も思い出を披露。さらなる発展を祈念し、田邊祐司・記念式典実行委員長の音頭で一本締めを行い、散会した。

【ニュース専修2004年10月号7面】

## 夏期留学プログラム体験記

今年の夏期留学プログラムに参加した2学生からの体験記を紹介しよう。

### ホストファザーの天ぷらに感激

米国・オレゴン大留学 岩橋 健吾(文2)



▲ 州立公園スミス・ロックで  
(中央が岩橋くん)

私が短期留学したオレゴン大学があるユージーン市は、治安が良く、街の人々はとてもフレンドリーでした。レジャースポットのようなものではありませんでしたが、住み心地の良いところでした。大学内の設備も整っており、スポーツジムやビリヤード場や日本語入力の出来るパソコン室もありました。バリアフリーも日本の大学とは比べものにならないほど完備されていました。キャンパス内には多くの野生のリスや鳥がいました。

授業では、生活に必要な日常会話を勉強しアメリカのゲームをしたりと、日本では経験出来ない実践的な学習でした。アメリカ文化の授業では、礼儀作法やアーミッシュについて、ビデオや資料で勉強しました。アーミッシュについて、これまで知るきっかけがなかっただけに、良い経験となりました。授業中は日本人同士でも英語で討論したり、歌を聴いて問題に答えるなど、苦手なリスニングが鍛えられたと思います。

ホストファミリーは、学校の先生を引退したホストファザー一人でした。彼は私を、本当の家族のように接してくれました。料理が得意で、彼も好きな日本料理の天ぷらを作ってくれたのです。アメリカ人が作ってくれた日本食をいただいて、とてもうれしかったです。

初めての海外渡航でいろいろと心配でしたが、一緒に旅行した仲間たち、オレゴン大学の先生方、コーディネーターの人たち、そしてホストファザーに親切にしてもらい、感激しました。

### 路線バスに乗って新旧ソウル探索

韓国・檀国大学留学 今和泉 隆行(文1)



▲ 京畿道坡州市の「臨津閣」前で。  
後列左から4人目が和泉くん

今回の留学は、私にとって初の海外渡航でした。初の海外にして留学。少々不安でしたが、韓国に着くと、街並みから歩いている人まで日本とあまり変わりがなく、すぐになじめました。檀国大学ソウルキャンパスは、古くからの市街地である江北と、80年代以降に開発された新市街地の江南のちょうど間にあり、路線バスを使えばどちらにも簡単にいける便利な場所です。周辺の街の雰囲気も良く、キャンパスも緑に恵まれています。

授業内容は、2時間は日本語、2時間は韓国語での授業で、1日一つの文法を学びま

す。最初の2時間の日本語の説明を理解し、後の2時間はその文法を使ってメンバー同士で質問し合い、自然と記憶に定着させていく授業でした。私は4月に韓国語の勉強を始めたばかりですが、韓国語だけの授業でも、私たちが知っている単語で説明してくれるなどの配慮があり、大変助かりました。日本人の他にモンゴル、中国、メキシコ、バングラデシュ、ナイジェリアからの留学生のクラスもあり、国際色豊かでした。彼らとクラスは違いましたが、休み時間には打ち解けてコリア語で話すことができました。

学生寮はアパートで、シャワーも台所も(部屋によっては電話もテレビも)部屋の中にあり、自立した生活が送れました。韓国人は、大学でも街でも、好意的に話してくれる人ばかりでした。韓国語が分からなくても、話していて楽しかったので、自然に韓国語を使う機会が増え、先生だけでなく、たくさんの人にお世話になりました。人と関わる楽しさも知り、語学以外の収穫もありました。

これからも韓国語の学習を続けていきます。

【ニュース専修2004年10月号7面】

## 英語力をつける読書ガイド 6

直訳は誤訳 — 外国語上達の指標 —

三浦 弘 (文学部教授)



『通訳の英語 日本語』(小松達也著、文春新書2003年刊、714円)

「直訳は誤訳である」。この意味が実感をもって分かる人は、外国語のできる人です。あるいは通訳技術を身につければ、さらに語学力が伸びます。それが分からない人は、外国語そのものの学習が必要です。本書第5章「同時通訳者がすすめる英語上達法」を読んで、まず通訳訓練を応用した基礎力の向上に努めてください。

上記の指標は、筆者が日頃の授業で学生に話していることです。本来、通訳訓練は言語学習が必要のないレベルに達した人々を対象に行われていました。しかし、近年では外国語上達法として大学や高校の授業でも採り入れられています。この本の著者は約40年にわたって、日本の首相外交をはじめ政治・産業面のトップで活躍してきた同時通訳者ですが、現在は大学で教鞭を執っています。大学で教え始めてから、言語学の専門書を読んで、ご自身の経験を通して得たコツを理論的に分析されているそうです。興味深い点は、本書第3章「日本語と英語」に見られます。ここには「日英対照言語学」の具体例が凝縮されています。通常の大学英語教員とは正反対のアプローチですが、通訳体験と照らし合わせながら、両言語の差異を見事に導き出しています。その例文の発言者が著名な政治家であることも、鮮明な印象を与えてくれます。

「通訳の仕事」、「通訳の歴史」、「通訳者への道」等、本書1冊で通訳のアウトラインが分かります。通訳者・翻訳家をめざす人の入門書としてお薦めします。また、外国語学習の意味がつかめずに迷っている人も是非、ご一読ください。突破口が見えるはずです。

【ニュース専修2004年10月号7面】

## 04年秋期日本語日本事情プログラムおよび BCLプログラム スタート



▲和やかにカンパニー(歓迎会で)

「2004年秋期日本語日本事情プログラムおよびBCLプログラム」がスタートした。参加者は12カ国・地域から36人で、日本語・日本文化・日本の経営を学ぶBCLプログラム(=日本理解プログラム、国際交流協定校の留学生対象)参加者は24人。留学生たちは12月4日まで、12週間の勉学・研修に励んでいる。

開講式と歓迎パーティーは9月15日、生田キャンパスで開催され、参加の短期留学生たちを大林守国際交流センター長はじめ教職員、大勢の学生たちが温かく歓迎。三曲研究会の演奏も披露された。

プログラム参加4回目のセルゲイ・ガルシコさん(ロシア、極東国立総合大学卒)は「日本の建造物が残っているサハリンの生まれなので、子供の頃から日本をととても身近に感じていました。このプログラムでレベルアップし、日本の大学院に進学か、日本語を使う仕事に就きたいです」と抱負を語った。イベロアメリカーナ大学から初めて参加のアンドレア・アンスレスさん(メキシコ、BCLプログラム参加)は「日本語は日系メキシコ人から学びましたが、『まだまだ』です。会話が上手になって、日本の友人がたくさん出来たらうれしい」と目を輝かせた。

【ニュース専修2004年10月号7面】

## 多彩なパフォーマンスで交流 プレ・ハロウィンパーティー



留学生と市民が交流するプレ・ハロウィンパーティーが10月2日、生田キャンパスで約170人が参加して開催された＝写真。

本学の国際交流会(越後谷基代表・経済3)と多摩区の市民団体「世界の広場」が主催する企画で、日本語日本事情プログラムに研修中の短期留学生も多数参加し、仮装コンテスト、ゲームやダンスも飛び出した。国際交流会の柿木隆宏くん(経営3)は「多彩なパフォーマンスで盛り上がりました。地域の皆さんと、楽しさを共有できたと思います」と語った。

【ニュース専修2004年10月号7面】